

ストラスブール大学への短期訪問研究員報告書
(2023年4月23日～5月10日、フランス)

経営学部経営学科
教授 奥村 哲史

ストラスブール大学におけるダイバーシティ、グローバル状況への対応については、やはり近年、こうした課題へ適応する動きがあるとのことだった。第一は、オファーされる講義を英語にするかどうか、にあるとのこと。英語の講義を増やしたことにより、ビジネススクール（経営学大学院）は外国籍学生の履修数が増えた。学部でも経営学、経済学系は、講義を英語に切り替えることが、学問的内容からも親和性が高く、進行している。

他方、人文科学や他の社会科学の科目の中には講義を「英語へ切り替える」とこととフィットしない面のある領域もあり、フランス語のみである。

東洋大学で開講されている講義の提供言語の事情について質問を受けた。着任直後からコロナによる非対面講義が続いてきたので、回答用の知識が不十分だったが、経営学部および大学院において担当する講義の履修生に関する限り、留学生は中国からの学生が大半を占めているとの事情を伝えた。他方、かつて勤務していた国立大学は、当時の政府の留学生受け入れ拡大構想のもと、国費留学生を多く受け入れており、特に担当する大学院の講義では、日本人学生より留学生が多く、しかも国籍の多様性が高かった。

ただし、国費留学生という背景もあり、日本語能力は高くなかった。私の提出した履歴書に、出版された翻訳文献が7冊ほどあることも注目されたので、それへの質問と合わせ、当時の事情—留学生が多く、しかも多国籍だったが、日本語の読解力は低く、また日本人学生は英語の読解力はもとより会話力が低かったこと—への対応である旨を回答した。留学生は国際標準の文献をテキストとして日本語で受講でき、適宜、担当教員からは英語で補足を受けられたし、日本人学生は国際標準の文献を日本語で読むことができ、また意欲のある学生は当該原書に取り組む機会にもなり、また適宜、英語での質疑応答に触れることができた。

割り当てられた研究室で同室となった Koebel 教授とは、大学改革の方向性や課題、またコロナによる学生気質の変化についての意見交換を行った。

5月4日開催の"**Creativity, Innovation and Science**"セミナーに招かれる。終了後は発表者の Müller 准教授と東洋大学とご縁のある Heraud 教授と創造性と組織課題について意見交換を行った。また、セミナーを主催された NEUKAM 准教授とは翌日、グローバル経営における異文化課題について、特に翌週予定されている講演のテーマ「**Culture and Joint Gains in Negotiation**（交渉における文化とジョイントゲイン）」および信頼や公正の概念について意見交換を行った。特に、ご本人の企業実務での異文化体験を交えて、議論が高まった。

国際関係担当の Schmitt 教授と昼食を共にし、グローバル化とダイバーシティを契機に大学改革の現状を伺うとともに、既存の制度や科目にかかる調整や方向性に関する意見交換を行った。

さらに Schmitt 教授からは、ストラスブール大学がベトナムとフランス政府共同のビジネススクールの企画・設立・運営に3年近く携わった体験談を伺った。いわゆる内なる国際化から外への国際化である。文化的、政治的、経済的諸制約を解決しながら実現された

「国際化」は非常に印象的だった。その後、欧米の経営大学院が私立で現地に入り、競合になっているという。

またコロナ下での学部講義については履修生のモチベーションや成績等について、本学での諸体験との類似性がみられた。教授からは国際担当として各講義で日本への交換留学を促すが、反応が乏しいということ伺った。どう背中を押せばよいか、との問いをいただいたが、当事者たる学生への問いかけなしに回答は難しく、滞在期間中は、特に最初の週が現地のバカンスだったため、学生との接点がなく、資料は得られなかった。

昨今の事情では、フランスにおける年金支給時期の 62 歳から 64 歳への変更をめぐる反発について解説をいただいた。経済合理的理解と、イデオロギー的反動がファカルティの中にもみられるという。

アルザスの歴史的経緯についても、意見交換を行った。独仏間でのリベンジの応酬と、EU にいたる解決過程と今日の姿は、歴史からの学習と平和交渉のひとつの形態として大切な資料となる。また、バーデンバーデンやハイデルベルクへ訪問することの意義についての教示をいただいた。

エコール・ド・ナンシーについては、その事業の興隆と現状について、複数の経営系の研究者との対話の中で質問したが、特に個別の知識に出会うことはなかった。他方、こうした関心自体に興味をもってくれたらしく、逆に俳句や日本料理等の文化的項目について話が弾むこととなった。市の観光局でエコール・ド・ナンシーの関連を尋ねると、近年、これを観光資源とした取り組みもあり、工房に博物館が併設されるなどの試みを紹介された。ぜひ現地に足を運びたかったが、日程的制約のため実現できなかったが、多くの公開情報から現状を学んだ。

5月2日には、MUFJ(日仏学会館)と JSPS (独立行政法人日本学術振興会ストラスブール研究連絡センター)が共催するセミナーで、「Culture and Joint Gains in Negotiation」という演題で講演した。東洋大学を含む日本の大学への訪問を終えて帰国されたばかりの MUFJ 館長 Forte 准教授の紹介に始まり、質疑応答を含め約 90 分間のセミナーとなった。ストラスブール大学から 3 名の名誉教授の他、ビジネススクールから 3 名の教授、特に名刺交換はなかったが他に数名のフランスのシニアの方々、そして在ストラスブール日本国総領事館から副領事を含む、医療や生理学研究の領域の方々が数名出席され、ほぼ満席だった。

Helmchen 教授の専門であるイノベーション、経営戦略論のトピックスとイノベーションのインターフェイスにおけるコンフリクトと解決について交差する研究領域や現在フランスで課題となっている年金受給年齢の引き上げをめぐる紛争と経済、イデオロギーにかかる意見交換を行った。

5月4~5日の2日間にわたり開催された「[The Augustin Cournot Doctoral Days](#)」に招待され、いくつかの研究報告に参加した。DONZE 教授 (Directeur Ecole Doctorale Augustin Cournot) とは交差する研究領域があり、教授法や教材研究について意見交換を行った。また、母国ベトナムで家族で事業を営んでいて学界に転身しつつある博士課程の学生からは、家業で多くの日本企業との取引があり、これを研究に活かしたいとの意向があり、帰国後も交流が続いている。

短期間であったが、ストラスブール大学の研究者と有意義な交流をもつことができた。